

優秀賞 埼玉県 崎山 みゆき 様 (50代)

「お母さんの年金手帳が出てきたんだよ。ずっと切れることなく、払っていて。この人、一生懸命働き続けてきたんだなあ、オレも迷惑かけちゃったなあと、泣けてきてさ…。」

誰に言うともなく、父が、鼻をすすりながら言った。母の死後、一週間ほどしてからだった。

昭和13年生まれの女性が、正社員として民間企業で定年退職まで働くというのは、社会的風潮、制度、体力的に、かなり難しかった。地元の零細企業の総務にいたため、給与支払、社会保険、就業規則の作成・改訂、業界団体の賀詞交歓会司会、制服の受発注、若い社員からのお悩み相談…。何でも屋だった。今でも、アジサイの時期になると思いだすのは「サンテイキソ」という英語よりも難解な言葉をつぶやきながら、朝早く家を出て行った母の姿である。給与計算の時期には、夜に電話が鳴る。「みゆき、残業でご飯作れないわ。モスバーガーしか開いてないの。何バーガーにする？」子供には、楽しかった。

我が家は、父も企業の総務・人事に勤務していたため、しばしば、夫婦で仕事を教えあっていた。家庭内では「フヨウコウジョ」「キソネンキン」「キギョウネンキン」など、子供にとっては異次元世界のセリフが、日常会話に混ざっていた。もちろん意味など解らないので、聞き流し…。英語のlisteningみたいなものである。ただ、大人になって働くと、必ず関わらなくてはいけないものだけということだけは、肌感覚として身についた。キャリア教育という概念もない時代のことである。

我が家は、四人家族。全員がサラリーマンだった時期があった。月末の合言葉は「年金が高いね。」ただ、父も母も、一度も「払いたくない」「なくなればいい」とは言わなかった。こんな制度がなくなれば、自分の総務の仕事が減って万々歳なのに…と思い、不思議だった。

20代の時、母と二人でお茶をしながら、尋ねたことがあった。「私達若い世代は、もらえるかわからないのに、どうして払うの?」「自分で働いて、納めることができるのは、幸せなことなのよ」「もらえないかもしれないのに…」「働くことができ、お金を払うことができるということが、幸せなことなのよ」と、また同じ答えが返ってきた。この時、

母の仕事に対する考え方が、少しだけ見えた気がした。納める・納めない、高い・高くない、の前に、働きざまが横たわっているのを感じた。

その母は、定年退職後まもなく、難病を発症し、余命宣告を受けた。これからが私の人生だと、ボランティアや旅行を始めた矢先だっただけに、本人も家族も、ショックは大きかった。経済的な打撃は、病気の進行とともに大きくなった。その時に母を助けたのが、年金だった。正社員で定年までいたことは、強い。ただ、私は、納め続けたことよりも、納めることができることに幸せと責任を感じていた「母の働きざま」が、母を助けてくれたのだと思った。

年金の受給は、その人の働き方・生き方という両方の轍だと思う。昨今問われているキャリアの語源は「轍」だと言われている。自分の後に残るものだ。母の年金手帳は、母の働きざま。母の後ろに残された、キャリアだ。私も、くっきりと、ブレのない轍を残したい。